

カリブ海・グアドループ島の思い出

先月に続いてカリブ海の島での話題、今回は夢のような思い出です。以下は決して私がエッチでこうした場面にことさら興味を抱いたということではなく、ごく普通の日本人男性がはからずも目にした光景ということでご解釈ください。地域と国民性が異なるとこんな場面もあるという異文化体験をご紹介しますので。

——まさか、こんな自然な形で、マダム、マドモアゼルたちの美しい肢体を目にすることになるとは予期しませんでした。カリブ海の明るい太陽と紺碧の海。その砂浜やホテルのプールサイドで輝くような白い肌をさらしている女性のグループがあちこちにありました。日光浴をするフランスから訪れた観光客でした。

なんと女性の3分の1ほどはトップレスです。12月、陽光の少ない北の本国から来て、少しでも多くの太陽を体に浴びようと、胸を隠していた水着も取り去り浜辺に横たわる婦人たち。キャッ キャッ と水しぶきをあげて走り回る少女たちの、胸の硬い蕾が陽光にキラキラ光っています。

カメラを手にした私は、この美しい自然のままの姿を映像に収めたいと、シャッターを押したい衝動に駆られながらも、誤解を避けるために、また、せっかく撮った仕事用の写真の入っているフィルムを、それがもとで、そっくり巻き上げられても困ると思って、一度もレンズを彼女らに向けられませんでした。

そもそも、ポロシャツとはいえ、衣服を身にまとった男、しかも、肌色の違う東洋人がそこにいること自体が不自然で不釣合いに思えたのでした。

かつて、ジスカール・ジスタン大統領の音頭で4カ国首脳会談の場ともなったフランスのグアドループ島。そんなカリブ海に浮かぶ小さな島にもSGIメンバーが活躍していました。「カリブ海の面白い話題と写真を新年号に送ってくるように！」といった東京本社からの指示を受けた私は、さっそく任地のパナマから此の島まで飛行機で足を伸ばしたのでした。

グアドループは、同じカリブ海の南方に浮かぶマルチニク諸島と並んで、フランスの県になっています。スペイン語と英語さえできれば、ラテン・アメリカの地域内ならどこでも通用すると思っていた私は、まず電話で、現地のメンバーと訪問の約束をとることから壁にぶつかってしまいました。たまたま、電話を持っているメンバーが母国語のフランス語しかできなかったからです。

そこで、フランス語のできるパナマの友人に、こちらの電話口に来てもらい、用件を伝えてもらいました。私がスペイン語で話し、それをフランス語に訳し話してもらうわけです。私自身のスペイン語もまだ完ぺきではなかったこともあって結構な時間もかかりましたが、なんとか訪問の日時や現地での取材活動の調整はできました。

さて、パナマ市の空港から乗った飛行機はエール・フランスのジャンボジェット機でした。こんな小さな島にもジャンボ機が、そしてパリから飛んでくるあの超音速のコンコルドさえ離着陸できる飛行場が完備していたのです。

上空の飛行機から島を見下ろすと、四角形あるいは長方形に青黒く見える部分がありました。機を降りてから地上を車で走ってみると、それは延々と続く砂糖きびの畑だったのです。2メートルから4メー

トルほどに伸びた濃い緑色の砂糖きびの葉が太陽の光を反射していました。

島の中学校で国語つまりフランス語を教えているフランク・ブァンスノさんは、人なつっこい笑顔で友の活躍ぶりを語ってくれました。パリ留学中に仏法にめぐり合い島に帰ってきた青年や、パリにいた島の出身の男性と結婚して海を越えてきたパリジェンヌ。これらのメンバーが中心となって仏教理解の波が広がっていったのです。妙法の種子は、パリの風に乗ってカリブ海の小島に芽を出し、しっかりと根を張っていたのでした。

私はメンバーの協力を得ながら、予定していたインタビューや写真の取材を順調に進めることができました。前年の9月にはこの島から6人が日本での研修会に参加したという。島から空路8時間でまずパリに向かい、そこでフランスのメンバーと合流して13時間かけての日本への長旅です。

「日本での研修会は感激でした。あのシンカンセンにも乗りました。私たち歓迎してくれた日本の友の真心に感動の日々でした」

こう語るブァンスノさんは、滞在中に受けた真心のお礼にと、車を駆使して私を案内、メンバーの紹介や通訳にもあたってくれたのです。日本の友の真心が、日本を遠く離れた小さな島で花を開き今、自分が真心に包まれている。そう思うと、世界を結ぶ妙法の絆の素晴らしさをかみしめずにはおられませんのでした。

夜のホテルに戻ると、夕食会のレストランは、昼間の雰囲気とまったく趣を異にしていました。男性こそポロシャツに半ズボン姿もみられましたが、女性は胸の大きく開いたロングドレスをまとい、香水の香りを艶やかに漂わせています。シャンペンやワインをあげ、バンドの演奏に乗ってチークダンスを踊る舞台には、これまたポロシャツに長ズボンをはいた東洋からきた“仕事男”はどうみても場違いでした。

早々に部屋に引き上げました。観光用に作られたリゾートホテルの部屋は、美しく優雅でした。部屋の真中には大きな鏡が、洗面所にはトイレと並んで白色のビデがついていました。どこまでいっても、ここは避寒地、ヨーロッパのバケーションの受け入れ地なのです。

せっかくここまで来て、まじめ一本の新年号の取材だけでは物足りない面もありましたが、マドモアゼルたちの海辺で戯れる美しい肢体の観察は、胸躍る楽しい記憶に残る旅ともなったのでした。

<ハイチ>

こんな夢物語のようなフランス語圏の島もあるかと思うと、カリブ海にある「ミニアフリカ」とも言える国の姿には驚いたものです。キューバのずっと東側に位置するイスパニア島の西側にハイチ共和国、東側にドミニカ共和国があります。

このハイチは同じフランス語圏の国ですが、国民のほとんどの肌が黒色です。「カリブ海の中のアフリカ」なんとも言われています。この国への入国はアメリカのマイアミからでした。と、120人乗りの飛行機内に入った途端、乗客が発する強い臭いと持ちこみの荷物の多さに圧倒されたのです。

「外国人の方は最前列のシートに座ってください」——乗降口でフライトアテンダントからの言葉でした。たぶん、ハイチ人乗客の強烈な体臭を避けられるようにだったと思います。乗ってくる女性の多くが両手に鍋や釜を抱え乗りこみ、座席の間の通路もやっと通れるくらい。駐機中の窓から外を見ると大変な数の段ボール箱やトランク、網のかかった衣装類などが飛行機の貨物室に積み込まれていくのが目に入りました。いわば乗客の大部分がアメリカへの“買い出し部隊”だったのです。

ハイチの空港で入国審査と荷物チェックを済ませて外に出ると、パナマから電話で話したスペイン語

が堪能なピエール・チャーレスさんが出迎えてくれました。テレビ局でスポーツニュースを担当している彼はハイチでは有力者の一人です。同行のもう一人の日本人と彼のジープに乗り、口を突いて出てきたのは、はからずも同じ言葉でした。

「まさにアフリカだね」。そんな国にも仏教徒が10人余り誕生した、とのチャーレスさんの知らせを受けて訪れたわけです。

空港からホテルに向かう途中、突然スコールが襲ってきました。激しい雨に道路はぬかり、さすがのジープもタイヤが泥に食い込まれてしまった。エンジンをふかしハンドルを切っても車輪は泥の上を滑るだけ。時間は夜の9時。周囲は真っ暗です。しばらくするとラッキーなことに通りかかった3人のハイチ人が後ろからジープを押してくれました。ようやく泥沼を脱した車はなんとかホテルまでたどり着くことが出来たのでした。

問題は、この3人が車の近くに寄って来たとき、私はとっさに“ヤバイ！襲われる！”と思ったことです。漆黒の闇の中に浮かんできた漆黒な顔、白い歯だけが闇の中で見えたからです。でも杞憂でした。

「困っている人は助けてあげたい」との心は人間だれにもある。肌の色が黒かろうが褐色だろうが白だろうが・・・瞬間でも疑いの心が出てきた自分を反省したものでした。

車体に真っ赤な原色の絵が描かれたバスが走り、路上の街角では世界的に知られたハイチ独特の絵が売られています。滞在中に食したカタツムリが原因でひどい下痢になったものの、こんなフランスとアフリカ文化が漂う国での取材は、楽しい3日間となったのでした。かつて海賊が暗躍したというカリブ海にはこんな世界があることをご紹介した次第です。